
IS インフィニットストラトス ~輝く永久。無限の空へ願いを。~

高坂夕弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス 　　く輝く永久。無限の空へ願いを。
　　く

【Nコード】

N6299Y

【作者名】

高坂夕弥

【あらすじ】

IS インフィニットストラトス。
女性にしか使えないISが使えるようになってしまった少年。

少年は、これからどういう道をたどるのか、それは、誰にもわからない。

これは、ある意味ぶっこわねています。
ほぼ作者得です。

よかったら読んで下さい。

第一話（前書き）

高坂夕弥といいます。

元々は、バカテスの小説

「バカとテストと超電磁砲」を書いていましたが、
ISの小説も書きたくなって、最初作っていた小説を作り直しました。

文才とかないですが、よかったら読んで、感想を書いて下さるとありがたいです。

ではよろしく願います。

第一話

……ふと
思い出す記憶、……、「また会えるよね……。」

「多分ね。」

「約束だよ、

「忘れないでね！」

……ある少女と結んだ約束……

あの時から四年ぐらい経った。

あの子が覚えているか知らないし、あの時はある意味大変だった。離れてから僕は次に進むために動き出していたから、いつまでも構うことができなかった。

あえて、もう一度言う。

あの時から、

四年ぐらい経った。

俺は、何でこんな所に居るんだろう？

……周りを見渡すと、

女、女、女、女……

……女だらけ

の場所。

そう、俺は一年前に新しくできた友達の付き添いで、とある研究所に行った。

友達、彼女は、ISと呼ばれるものの操縦者で、この国、日本代表

候補生だった。

彼女は、最初は口も聞かず一人で居るかのようだったけど、次第に心を開いてくれて少しずつ話出来るようになって、少しずつ仲良くなった。

ある日、彼女は見せたい物があると言って僕を連れていくとそこはIS研究所。

彼女は代表候補生であり、訓練している所を俺に見てもらいたかっただろうから俺を連れて来た。

彼女の訓練も終わり、彼女が待機している所に移動しようとする、研究者らしき人にぶつかった。

ぶつかったことは、たいしたことは無かったけど、問題はその後だ。

ぶつかった勢いで、近くにあったメンテナンス中のIS「打鉄」に触れてしまった。

すると、そのISは突然光りだして、俺の頭の中にたくさんの信号が送られてくる。そして、気づくと男が使えないはずのISに俺は乗っていた。

それがすべてのはじまりでそこからは、俺の意思などからつきり無視でどんどん話がすすんでいき、俺は国の役人達によって、女だけの学校『IS学園』に入学させられてしまった。

そして現在、

絶賛アウエー状態です。

隣の席には、青髪で眼鏡をかけている俺の友達がいるけど、その他

はアウエー！

「おはようございます！私がこの1ー4の担任の唐石悠希です。」
担任の挨拶が始まって、今だ全員の視線が俺に集まり、アウエー。
正直つらい。

「…だ、大丈夫？」

心配してくれる優しい友達。

更識簪。

簪が優しく声をかけてくれたから、空元気をみせて

「大丈夫！」と答えてみせた。

担任、副担任の紹介が終わり、自己紹介に移っていった。

担任の意向で、自己紹介の順番は、くじで決まったんだが、狙っていたかのように俺は一番最後になってしまった。

自己紹介が進み、最後……………俺の番。

周りからの視線が痛い、最初はきちんと決めたいから頑張ってる。

「俺は、王賀優。なんだかんだでISに乗れる男です。とりあえず一年間よろしく願います。」

ふう〜、一応やり切れた。

歓声とか聞こえたけど、気にしないで、とりあえず頑張っている。

「が、頑張って、いこう。優。」

簪もいるし、何とか乗り切れると思う。

……………多分。

第二話（前書き）

高坂夕弥です。

第二話です。

今、完全に勢いで書いています。

定期更新にしたいけどそれは後ほど。

空牙刹那さん、感想ありがとうございます。

ぜひ、また感想を書いてくれると嬉しいです。

そしてほかの皆さん。

どうかこの作品に感想を下さい！

とりあえず、ではどつど。

第二話

俺は王賀優。

なんだかんだで、ここ、IS学園に入れられてしまった。
IS学園は、元々女子校だ。つまり、男子が俺一人となる。ということ
は、今、教室内外から俺の事を見にたくさん生徒がいる。

「へえ、噂の男子。ちよつとカツコイイかも。」

「なんかさ、黒髪で、なんかクールっていう感じがさ。」

「アタシ、話かけてこようかな？」

「なに、あんた。抜け駆けするの？」

女子達が牽制しあって、ピリピリとしていて何か嫌。

まあ、初日はそんなものだろうと諦める俺、立派。

まあ、わかったか、わからないかよくわからない授業を受け、よう
やく昼休みになった。

「簪、飯食いに行こう。」

「、うん、い、いいよ。」

「何、あの子王賀君の知り合い？」

「名前で呼ばれているし、何かうらやましいー！」

まあ、周りの声は置いていて、簪と一緒に教室を出て食堂に行こう
とする。

誰か体ごと手をひっぱられました。

簪と離れちゃいけないと思って簪の手をぎゅっと握り「／／／……手。…ちよっと／／。優君」

気にしない、そうして一緒につれてくれました。

まあ、着いたのは、食堂なんだけど、

俺達を連れて来た奴は、俺の知り合い、まあ友達だった。

「久しぶり、優。」

「い、一夏？一夏なのか？」

「うん、そうだよ。」

「／／、………優君。誰？」

「あゝ、違う人までつれてきちゃった。まあいいか。」
いいのかよ！とツッコミたくなる俺だったが、ちよっと我慢。

「こいつが織斑一夏。」

俺の幼なじみだ。」

「そして、更識簪。」

俺が転校した先で友達になった。」

「……………（友達は嫌、出来れば、こゝ、恋人がいいかも）よ、よろしく。」

「よろしく！簪さん。」

ちなみに二人の心の会話は、

「き、君誰？優君の何なの？優君は私のものだから、取らないで。」

（簪）

「そっちこそ何？」

私は、優とあなたより早く会っていて、長い時間過ごしているんだから！」

（一夏）

「……、だ、だけど優が好きな気持ちはあ、あなたには負けない。」

（簪）

「こっちのセリフだよ！」（一夏）

まあ、優には、この会話は伝わっていない。

とりあえず、食堂に来たから飯でも食おうっていうことになって、それぞれ食券を買いに行った。

一夏は日帰り定食の焼き魚定食。

簪は、かき揚げうどん。

ちなみに俺は、冷奴定食。だって豆が好きなんだもん。

まあ、三人で、食べながら話をしていると話に割り込んで来る人がいた。

「あゝ！ゆーきゅんだ〜。かんちゃんもいるし、おりむ〜もいる〜。」

特徴的な話し方をする人、多分……、

「…、ほ、本音、どうしたの。」

やっぱりあいつか。

「あの子誰？優の知り合い？」「あいつは、布仏本音。」

「籬の……、まあ幼なじみみたいなものだろう。一夏の事を知っているということは、同じクラスなんだろ。」

「き、気づいて無かった。（本当は、優と同じクラスじゃなくて残念でその場合じゃなかったから、……………あと千冬姉痛い。）」

まあ、話していると、

「優、携帯持っているでしょ？」

「持っているけど。」

「貸して、アドレス交換しよ！」

「……私も、…実は優君のアドレス知らない。」

「はい、わたしもゆーきゅんのアドレスしりたーい。」

「わかった、わかったからじゃあ、俺から送るわ。」

……………赤外線受信中……………

「よし！優の登録完了！」「…、私も、終わった。」「わたしも。」

まあ、ついでに言うておくと周りで話を聞いていた女子達に迫られて、俺の持っているアドレスはめちゃくちゃ増えた。

時が過ぎて放課後。

俺は今家にいる。

なぜか千冬さんと共に。

簡単に訳を説明すると、元々自宅通学だった俺を無理矢理寮に入れることになってそのための生活用品を取りに来たということになる。俺は衣装持ちじゃないし、服はそこまでいららない。

俺の荷物の半分以上は、

アニメ、アニメ、アニメグッズだ。

深夜アニメをよく見ていた俺は、小遣いでよくアニメグッズを買っていた。

「王賀。お前が何に興味があるかは関係ないが、深夜まで起きていたら、……………分かってるよな？」

「は、はい。ちゃんと録画して見ます。」

「よろしい。」

はあく、やっぱりこええ。アニメはリアルタイムで見るのがいいんだけどな。

まあ、仕方ない。諦めるしかない。

荷物を持って学園に着いたのは、夜の8時半。

飯は、千冬さんにラーメンおごってもらったからいいけど。

俺の部屋は、三人部屋。

つまり女子と同室ということになる。

心を決めた俺は、部屋のドアを開けると

「えっ！嘘！優？」
「／／／／／／／／／／」

俺が見たものは、

二人の、

一人は黒髪サイドテールで二つの豊かな果実の持ち主で、もう一人は、

青髪でまだ青いけど、成長する気配も見せる果実の持ち主。

その彼女達がバスタオルしか体を隠していなくて、
それを見た俺の行く末は……………ゴンッ×2

ですよね。

俺はそれと同時に意識を手放した。

ああ、あいつらの……………裸……………(ダバダバ)

第三話（前書き）

高坂夕弥です。

第三話、原作ヒロインがです。

先に謝っておきます。

すみませんでした。

グダグダで内容もめっちゃめっちゃですが皆さん温かい目で読んで下さい。

そして、感想、アドバイスをお願いします。

第三話

俺が目を覚ましたのは、それから一時間後だった。

「ごめん。優」

「……ごめんなさい、優君」

「いいよ、俺にも非があった訳だし。」

まあ、それは、解決したし早く荷解きを始めないと千冬さんに……。
早くしよう。

「私も手伝うよ。」

「……わ、私も。」

二人も手伝ってくれたら早く終わるし、ありがたい。と思い、こいつらに甘えることにした。

荷解きが終わった後、いろんな取り決めとかをした。シャワーの間とか、ベッドの位置とか。

なぜか俺は真ん中のベッドになったが俺は気にしない。

消灯し、俺は夢の中に落ちた。

懐かしい光景が広がっていた。

夢は複数見るものらしく、一つは、一夏との出会いだった。

そしてもう一つは、簪との出会いの時。

そして俺が目を覚ますと、

なぜいちかさんとかんざしさんがおれにだきついているの？

俺の右腕に簪、左腕に一夏が抱き着いて眠っていた。

ナゼコンナコトニナツタノ。

こいつらの優しく聞こえる寝息、腕に押し付けられる果実。

俺は、理性でその誘惑を振り切り、心を落ち着かせるためにシャワーを浴びた。

後でこいつらにこのことを聞いたんだが、

一夏「だって懐かしくて、小学校の時思いだして、つい……。」「
簪「……負けたくなかったもん。」

まあ、簪が何に負けたくなかったかは置いて、また囲まれながら朝食を済ませ、教室に向かった。

一夏は、一組だから俺達と別れるのだがそれを渋っていると、千冬さんの出席簿アタックをくらって涙目だった。

ここの授業は確かにレベルが高い。だけどついていけないというレベルじゃない。ISの知識も入学が決まってから簪に教えてもらっていたから問題ない。

問題なのは、毎回の授業で先生が俺をあてる回数が多い。

珍しいのはわかるがこれは勘弁してくれ。

休み時間に簪に「……大丈夫？頑張つてね。」と言われると少し力が湧くからまた俺は授業に臨んだ。

4時間目、担任の唐石先生のIS知識の授業の時、唐石先生は、

「最初にクラス代表を決めますー。」と言った。

それを聞いたクラスメートは一瞬にして俺の方を見た。そして、

「王賀君がいいと思いますー！」と一人の生徒が言つとその一言で全員がうなづいた。

俺には、この状況でクラス代表をさけられる訳もなく結局俺がやることになった。

一方その頃、一夏は？……………

一夏side

「クラス代表を決めたいのだが、自薦他薦は問わない。誰かやってみたい者はいるか？」

千冬姉が授業中にこういうことを言い出した。

「なんかきつそう。」

「あなた、やったら？」

「無理だよー。私には」

「このクラスで適任者いる？」

「うーん？一夏さんぐらいじゃない？他は多分むりだよ。」

「あーあ、このクラスに王賀君が居てくれれば。」

「それ、私も思った。」

「あたしもー！」

何で私？と思いつつも優がいなかったのは残念だな、と思った。

誰も決まらず、5分経つと

「あー！もうっ！じれったいですわ！クラス代表にわたくしセシリア・オルコット以外に誰が適任者がいると思って！」

エリートで貴族な高貴なわたくしがこんな極東の地にいるというだけでもありがたいのに。」

何？この人？

私達馬鹿にされなきゃいけないの？

怒りが込み上げてきたけど私はぐっつと我慢した。

まあ、我慢できたのはほんの一、二分だったけど。

「それになんですか、あの猿は？！えっーと、王賀優でしたっけ？」

何故優の名前を出すんだろっ？

「極東の猿の癖にわたくしより目立つなんて！あんな下衆みたいな猿は、わたくしにひざまずいて生きていけばよろしいのに。」

その、セシリアさんの悪口がエスカレートしてる。

私、少しムカついてきたけど我慢。

千冬姉恐いし。

「あーあ、つらいですわ。あんな下等な猿達と同じ地上にいるなんて。」

やっぱり奴隷にしないと気が済みませんわ！

あーあ、こんな島国ー

「うっさい！居たくないなら帰りなよ！」

許さない！優のことをあんなに侮辱して！

「あ、あなたなんてことをおっしやるかしら、高貴なわたくし、セ

シリア・オルコットに対して!」

「そつちこそ何よ!何処が高貴?ふざけないで。適任者ならもつづくに決まるんじゃないの?」

やばい、怒りが抑えられない。

「そして、ここに居ない優のことを馬鹿にするの!

あなた、何も知らないくせにつ!この金髪ビッチ!!!」

「な、なんてことをおっしゃいますの!わたくしもう怒りましたわ。決闘ですわ!わたくしが勝ったら、あなたもその猿も奴隷にしますわよ!」

「いいよ……、そのかわり私が勝ったら優の目の前でひざまずいて優に謝れ!」

「静まれ、その決着私が見てやろう。一週間後、第三アリーナで行う。両名ともいいな!」

「構いませんわ。」

「いいですよ。」

「よし!ではこれで決まりだ!」

第四話（前書き）

この話、かなり短いですが、
感想をお願いします

第四話

「バカじゃないの。」

「はうっ！」

一夏がいきなりイギリスの代表候補生と決闘するとか言い出した。

「一応私も代表候補生だけど、代表候補生は操縦技術、時間とか総合して選んだ人達なんだよ。………た、多分今のところかてないと思う。」

「でも、やらなきゃいけないの！」

「ど、どうして？」

そう簪が聞くと一夏が簪を隅っこの方に連れて行ってしまった。

「あの、ちょっとよろしくて？」

「う、何？」

金髪ロール？今頃こんな髪の人もいるのか。

「まあ、なんですか？その返事は！？わたくしに話し掛けられただけで光栄だというのに。」

何、こいつ女尊主義者か。なんかいやだな。

何とかしてあしらうか。

「まあ、気にしないでよ。俺、君の事しらないし。」

「まあ、わたくしのことを知らないと？」

やっぱり男というのは、下等な生き物なのですわね。わたくしがこの極東の地に降り立った事でも光栄だというのに！」

「とういか君誰？」

「イギリスの代表候補生！セシリア・オルコットですわ！」

あゝ、一夏がさっき言ってた奴か。

一夏が怒るのも無理ないかもしれぬな。

一応、ガツンとやってやるか。

「ねえ、知ってる？俺の携帯にISの創設者の篠ノ之束の番号が入ってるんだ。」

もし、俺がその事を束さんに言ったらどうなると思う？」

「……ぐう、ひ、卑怯ですわ」

「言われたくなかったら、言ってくるなよ。代表候補生なんだから？
そんぐらい考えとけて。」

決まった。………と思った俺がバカだった。

「け、決闘ですわ！」

クラス代表決定戦の後、わたくしと勝負しなさい！」

やだよ、どう断ろうかなと思っっていると、

「ほう、私はその試合を見てやろう。」

千冬さん、マジ勘弁してほしいわ。

「王賀、何か文句あるか？」

「いえ、ないです！」

千冬さん、恐ええ。

威圧感が凄まじいよ。

結局、やることになった。

第五話（前書き）

投稿できずにすみませんでした！

今度、今度こそは！

定期的に書きます。

なのでよろしくお願いします！

第五話

「「IS教えて下さい!!!」」

何だかんだで俺と一夏はよく考えると、あれっ？自分達ISの事あまり知らないよね？ということに気づいて、今に至る

「……べつに、…い、いいけど。」

「「ホントに!？」」

「……う、うん。」

「ありがとう。簪さん。」

「……実際に乗る機体あるの?……訓練機は借りてきた?……なきや……教えられないよ。」

簪からの言葉で、上がっていたテンションが急降下した。

訓練機を今から借りようとすると……、つらい。

だからムリ。

専用機はもっていない。

だから今日は、無理だということになる。

仕方ないので、体を動かそうということになり、俺、一夏、簪、…

…なぜか本音も一緒にランニングをしていた。

「ゆーきゅん、きついよ〜。」

「じゃあ、なんで自分からやるって言ったんだ!」

「……………本音、バカ?」

俺と簪のコンボ。

「かんちゃんもゆーきゅんもひどい〜。」

まあ、こんな感じで走っていると、

「あそこに何か落ちてくるよ!?!」

一夏の言った後、すごい音がした。

「行ってみよ!」

「ああ」

「……………わかった。」

「わ〜、おもしろそ〜。」という訳で、何かが落ちた場所に向かった。

「お前、来てしまったのか。」

落ちた場所にもう千冬さんと山田先生が来ていた。

「…、あのバカ者が。」

千冬さんが何か知ってる、まさか?

一夏も同じことを考えたらしい。

ということとは……………。

「ちーいちゃーあーんっ!?!」

「剥がれる、束。」

……俺、一夏いっしょこんなことをやるのは、やっぱりあの人しかいなかった。

「やあ、元気〜！いつちゃんとゆーきゅん久しぶり〜。」

ISの生み出した張本人、篠ノ之束。

俺や千冬さん、一夏の幼なじみだ。

「いや〜、まさかゆーきゅんがIS使えるなんてね。確か、日本の代表候補生施設でうごかしたんだっけ？」

「まあ、そうだけど束姉」あの時、簪の訓練見るためにつれてかれてあなっただよな。懐かしい。

「何で、あんな所に行ったの？あんな奴らの訓練見たらダメだよ。だつてカスだもん！」

束姉の一言に、

「……………や、やっぱり私は、……………カス、……………。」簪がとてつもないダメージを食らった。

「簪、大丈夫か？束姉は認めた人間以外あななんだ。気にするな。」

「……………う、うん（わあー、優君に頭なでられちゃった。……………嬉しい。）わかった」

そして、再び俺は束姉を見てこう言った。

「束姉でも、俺の大事な人を傷つけるな。」

俺は……………怒るよ。」

「へーっ、ゆーきゅんも変わったんだ。もしかしてあの青髪がゆーきゅんを変えたのかな？……………

……………面白いや。青髪、名前は？」

少しビクッとしながらも

「……更識……簪です。」と簪は答えた。

「じゃあ、よろしくね。簪ちゃん。」

この反応に篠ノ之束を知る俺達は驚いた。

「束、珍しいな。」

「ちーちゃん、私もそう思うよ。」

「で、お前は何をしにきた？」

「すっかり忘れてたー！

ちよっと待ってねー！」

束姉が何か作業し始めた。

そして、作業が終わると、俺は束姉に呼ばれた。

「実は、ゆーきゅんといっちゃんの専用機を作りました！いっちゃんのは、まだ後届くのにな数日かかるけどね。

では、ご覧あれ！」

ゆーきゅんの専用機！」

空からコンテナが落ちてきて、そのコンテナからISの姿がみえた。

「束さん特製IS、その名も！」

『広翼！』

広翼と名付けられたISは赤と黄色を基調としたポケモンでいうホウオウみたいな色をしたISだった。

乗って初めて気づいた。

「マスター、どうしました？」

このISが人間と同じ様に俺と話せることを。

第五話（後書き）

感想、コメントお待ちしております。

第六話（前書き）

こんにちは、高坂夕弥です。

この話、かなり短いです。すみません。

感想、コメント、アドバイスお待ちしております。
では、どうぞ！

「第六話」

第六話

前回からの続き

「はじめまして、マスター……………って男ですか。私のマスターは」

束姉からもらった俺のISが喋りました。

普通は、ISが喋ることはない。これが常識だった……………はずだった。

「……………ど、どうしたの？優」

「……………なあ、ISって自由に喋るのか？」

……………ね、
……………熱あるの？「この事を言ったら、本気で心配されました。……………俺の頭を。」

自室

「で、結局何なんだ、お前は？」

俺は、自分が気になっていることを素直に聞いた。

「は、はあ、……私はお母様から与えられた人格、つまり心を持ち、それを声として発することの出来るISということになります」

「そのお母様というのは、東さんなんだな。」

「はい。その通りです。」

一応、『広翼』の事についていろいろ聞いた。

俺と束姉以外とは話せないこと、実体化ができることとか。

そして、その後簪にいろいろ教えてもらって数日が経ち、セシリア・オルコットとの決闘の日となった。

「王賀、お前が先に出ろ。」

「なんでですか？」

もともと他クラスである俺は、代表決定戦である一夏とセシリア・オルコットとの試合の後のエキシビジョンマッチとして俺の試合は予定されていた。

「織斑の専用機の搬入が遅れていてな、アリーナを使える時間も限度があるからな。」

「はあ、分かりました。」

「……………か、が、頑張ってね、優／＼」

「ドカーンと決めてきてよ」

一夏と特別にピッドに入った簪が声を掛けてくれた。

「王賀君！みんな見てるから頑張ってくださいよ！」担任である唐石先生も声を掛けてくれた。

俺と簪が所属している四組は、ISの授業の一環でこの試合を見に来ている。

とりあえず、がんばりますということだけ言って、『広翼』を装着しスタンバイした。

「初陣がんばりましょう、マスター」

「ああ」

俺は、アリーナを中心、先に出ていたセシリア・オルコットの元に飛び立った。

第六話（後書き）

どうでしたか？第六話。

やっぱり短いです。

明日、設定でも投稿するつもりです。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6299y/>

IS インフィニットストラトス ~輝く永久。無限の空へ願いを。~

2011年12月31日06時46分発行